強い牛にまたがるんだ。牛にまたがれない男は男ではないし、牛を操って狩りができなければ遊牧では生きていけない。そういう力は、戦になるとすごい戦力になるらしい。この辺りはまだだが、もっと城に近い方の連中が武人として城につれて行かれたという話は、最近になってよく聞く」

彼の妻が、心配そうに夫を見た。武人が足りなくなれば、この男も城へ連れて行かれるのかもしれない。命令に縛りつけられ、自由を失うのだ。

「でも自由の民ってんなら、命令なんて破って行かなきゃいいじゃないか」

トゥラスが言うと、男は重々しく首を振った。

「そういうやつらは、家に火を放たれたそうだ」

酷い話だ。民も嫌がっているというのに、何故戦火を広げる必要があるのだろうか。

老人は、眉間を抑えて声を絞った。

「支配の何が良いのかわからぬ。だが人間とは、それに溺れるとどこまでも追い求めるようだ。わしらはそれを美しいとは思わぬ。だから自由の民であり続けたいのだ。だがそれすらも脅かされておる。今の王は乱暴で強欲だ。この広い草原の大地を治めてもなお、まだ大地を欲している。それを得たところで、何になるというのか……」

いつから人は大地を自分のものだと言いだしたのか。ヒェミチリアスだけではない。他の国もそうだ。これははたして、動物の縄張りと同じなのだろうか。

「だが、ヒェミチリアスの王族が嫌いってわけじゃない」

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

男が肩をすくめて言った。

「確かに自由の民ホピネスの歴史を大きく変えたのは王族だ。だが、それによって俺たちは遊牧だけでは得られない食べ物を得ることができるようになった。みずみずしい果物や魚だ。それに王族は嫌な奴ばかりじゃない。王子は遊牧の民にも人気がある。だから武人として連れて行かれる時には、王子のためにと行くやつが多い。俺も、もし城へ行かなければならなくなったら、王子のために行こうと思っている」

「なぜ王子はそのように人気があるのですか？」

リビに答えたのは、老人だった。

「あのお方は、支配を考えるような方ではない。わしらのような遊牧の民に農耕を押し付けず、むしろこの自由な生き方を称えて下さった。王族もホピネスの末裔だ。同じ民族として誇り高いと言って下さる。王は我らに農耕を強要し、収穫できた食べ物の献上を強いろうとしているが、それを王子が止めて下さっているのだよ」

頷いて男が続けた。

「王子は自由の民の心を持っていたいと、時々この遊牧の草原にやってきて狩りをされるんだ。王子は弓の名手でもあるから、この辺りで開かれる闘牛や武芸の大会にもよく参加される。そんなふうに俺たちのそばで俺たちの生き方を見て、ヒェミチリアスの自由の民は、ヒェミチリアスが守らねばならないとも言って下さった。そう言って下さる王子の国を守る闘いとあらば、ってな」

その王子とは、遊牧の民にとって束縛の中の唯一の光なのだろうか。受け継がれてきた

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

文化を誇りに思いそれを継承していきたいと願う王子の考え方は、リビの考え方に似ているなとトゥラスは感じた。リビも生首の風習を真似て文化を継ごうとした。獣にこういう性質は無い。人間はつくづく不思議だとトゥラスは思った。自分もその人間であるのだと思うと、もっと不思議だ。

「そうだ、もうひとつ聞きたいことがあるんだ」

トゥラスはフードから目を覗かせて、男に訊ねた。

「この辺りでは、どうして白い髪が疎まれるんだ？　白い悪魔ってのは、一体何だ？」

男の妻が小首を傾げたので、トゥラスはフードを取った。男の妻は手を口に当て、静かに驚いた。

火の灯りが痛かったので、トゥラスはすぐにフードを被った。

「光がどうも苦手なんだ。生まれた時からこんなんで、太陽なんてとてもこの目じゃ見られない。でも俺は悪魔なんかじゃない」

「君は賢くたくましい人間だ」

男の声には芯が通っていた。

「同族が酷いことをした。申し訳ない。彼らは作り話を信じているんだ」

「その作り話とは？」

リビが身を乗り出した。

「遊牧の民に古くから伝わる神話のような物語じゃよ」

老人が手を叩いて、ゆっくりと歌いだした。

世界には夜の妖精が満ちていた。
静かの闇を作りだす、
黒い妖精が満ちていた。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

ある日のこと、
夜の世界に白い妖精が生まれたよ。
一人だけ白いから、
仲間外れにされてしまったよ。
白い妖精は怒ってしまって、
夜の世界から飛び出して、
怒ってどんどん大きくなって、
夜の世界を半分奪って、
白の世界を作ったよ。

老人が歌い終ると、男が言った。
「その白い世界が、昼になった。夜は黒い妖精、昼は白い妖精でできているんだ。黒い妖精は世界を半分奪われてしまったから、仕返しをしてやろうと、白い妖精を必死に探すんだ。夜空に輝く星は、白い妖精を探す黒い妖精の目なんだ」

リビが深く相槌を打った。
しかし、白い妖精が白い悪魔と関係があっても、悪いのは仲間外れにした黒い妖精じゃないかとトゥラスは思った。
それを察してか、老人は手を叩き始めた。
「まだ続きがある」
老人は、古い歌の続きを歌い始めた。

白い妖精は太陽の光をくれる。
でも腹を立てると怖ろしい。
怒ると雨を枯らし、
大地は干上がって、
殺される、殺される。
白い悪魔となって、
世界を枯らすだろう。

「だから、白い悪魔は忌み嫌われておるんじ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

ゃよ」

老人がそう言って、歌を締めくくった。

「それだけの理由で、白い髪の人間が疎まれるのですか？」

リビが訊ねると、男は難しい顔をした。

「実はこの昔話だけではないんだ。もう何十年も前の話になるが、この地で白い髪の子供が本当に生まれたことがあったらしいんだ。でも生まれた時期が悪くてね。その子供が生まれた年に、稀にみる酷い干ばつが重なったんだ。だから白い髪の子供は白い悪魔の化身だと言われるようになって、白い髪で生まれてきた人間を差別する酷い風習ができてしまったんだ」

これも文化というのだろうか。ただ白く生まれてきただけなのに、人は自分に忌む眼差しとあらゆる種類の暴力を向ける。

そうさせているのは、単なる作り話と偶然の歴史だ。たったそれだけなのに、そちらの方を大切にして、その時を生きる白い髪の人間の方を軽蔑し粗末にしている。それはおかしくないだろうかとトゥラスは思った。

単なる歴史と今を生きる人の心、どちらが大切か、森で生きた自分でさえもわかるというのに。

そんなトゥラスに、男は言った。

「君に酷いことをした我々の罪は消えないが、どうか全ての遊牧の民が君を拒絶しているとは思わないでくれ。私は君と会えて本当に良かったと思っている。君は良き友人だ」

友人という言葉が、トゥラスの胸を打った。森の兄弟や旅を共にする仲間はいるが、友人ができたのは初めてだったのだ。言い伝えや歴史を越えて歩み寄ってくれるこの男の姿

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

勢は、暴力によってえぐられたトゥラスの胸の傷を癒した。

男の三人の子供のうちの末の男児が、眠たそうに欠伸をした。母親が頭を撫でて抱いてやると、子供はすぐに寝息を立てた。

布の家のぽかりと空いた天井の穴は、もう星空になっていた。そう言えば、風もやや冷たくなった。いそいそと彼らは寝床の支度をし、こちらが何も言わないのに彼らはトゥラスらの寝床まで用意してくれた。

「少し外の風に当ってくる」

ヒョウビの温もりが欲しかった。人間について考えると、頭がごちゃごちゃになる。見知らぬ旅人を疑いもなく迎え入れるかと思えば、言い伝えを信じて人を疎み軽蔑する。

それだけではない。自分の生き方を誇りに思ったり、統治され束縛されるのを拒否したり、そうかと思えば統治する一族を嫌うわけでもない。王は嫌だが王子はいい。もし闘うのなら、王ではなく王子のために。

戦によって自由な生き方が奪われた時、戦のために王子に従うと男は言った。それは自由の民である彼らの矛盾だ。王子はそれほど魅力のある人物なのだろうか。

海のように果てしなく広い草原の中、トゥラスはヒョウビの隣に腰を下ろした。ヒョウビの瞳には、天の星空が輝いている。彼の無垢だが気高いその眼は、トゥラスのもやもやなど知らずに澄んでいる。

トゥラスは彼の少し成長した鬣（たてがみ）に顔を押し付けた。人間の変なしがらみなど関係ない獣の香りがする。懐かしく、心が落ち着いた。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

何もさえぎるものない草原に、一陣の風が滑りこむ。大平原に、月光に光る草の波紋が広がった。その波に、ヒョウビの鬣もトゥラスの白い髪も一緒にそよいだ。

「その髪は、本当に生まれつきなのか？」

唐突に背後から男が声をかけてきた。

「そうさ。変な色だろ？」

「いいや」

男は首を振って、寛大な優しい笑みを浮かべた。

「美しい色だ」

そんなことを言われたのは初めてなので、トゥラスは少し恥ずかしくなった。

「縞模様の彼とそっくりだな」

ヒョウビのことを言っているようだ。トゥラスは嬉しくなって、ヒョウビの白い毛並みの胴を撫でながら言った。

「そうだろう。俺たちは兄弟だからな」

「なるほどな。それなら、俺の髪が黒くて少し焦げ茶が入っているのは、牛の色をもらったからだな」

にこりと笑う男のその言い方は、気分の悪いものではなかった。皮肉などではなく、純粋な言葉だった。

「ここの牛は、みんな穏やかだな」

「ああ。でも闘牛となれば、すごい迫力だぞ」

「なんとなくわかるよ。あいつらみんな静かだけど、奥の方に何か大きくて強いものがあるように感じる。一度その素顔が出たら、すごい力で地を蹴って突っ込んでいくんだろ？」

草地にその巨体を横たえて眠る彼らを眺めながら、トゥラスは感じたことを素直に言ったつもりだった。だが、男は深く感嘆した

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

様子だった。

「よくわかるな。普段はのっそりと静かだから、外から来たやつらはたいてい甘く見て、けがをするんだ。俺もほら、子供の頃に角でやられたよ」

男は前髪を掻き上げ、額の古傷を見せた。それはかなり深いもので、一生消えそうにない。トゥラスはそれに驚いて肩をすくめてから、牛たちを見やった。

「でも横暴とかじゃなくて、賢い荒々しさだろ？　灰も塵も焼きつくすような突然吹きだすまっすぐな炎、そんな感じか？」

「たとえがうまいな」

そう言う男に、「そうか？」とトゥラスは笑った。だがそれを見た男の顔は、怪訝に眉をひそめて、それから「あ！」と声を上げた。

「誰かに似ているかと思ったら……、お前、さっき話した王子に似ているな」

「はぁ？」

突然話が変わって、今度はトゥラスが眉根を歪ませた。

「髪の色は全く違うがな。王子は黒の髪だから。でも顔は似てるよ。白い王子だ」

「なんだそりゃ？」

嘆息するトゥラスに、男はまた大きく笑った。変なやつだともう一度嘆息して、平原へ眼を移した。

森ではないが、自然をいっぱいに広げる大地。砂漠のようにここも姿は違えどもあらゆる命を育んでいる。そしてその自然と共存する民。自分の土地だと言い張って掘り返し、好き勝手に植物を植えたり建物を建ててしまうものとは違う生き方だ。

このように荒々しい自然と折り合いをつ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

けながらの彼らの生き方は、確かに誇られるべきだ。自由のすぐ裏側にある気まぐれな自然との闘いもあるが、彼らはそれを切り抜けながら共に生きている。強くたくましく、そして美しい生き方に思えた。

「なあ、旅の目的を教えてくれよ」

男が面白そうにこちらを覗きこんだ。トゥラスはいくらかの時間を有して頭を整理させてから、やはりチュンオウの言葉を借りることにした。

「闇を鎮めて、光を探す旅」

男はなるほどとでも言うように、目を輝かせながら何度も頷いた。

「それは素晴らしい旅だな」

「そうなのか？」

男はもう一度大きく頷いてから、ゆっくりと大平原を見渡した。そこには牛と白い家、それから羊などの家畜が点在している。

「俺たちは遊牧を自由と言うが、実はそれほど自由でもない。別の見方をすれば、かなり束縛された生き方だ。家畜の腹の具合や草原や空の顔色に合わせて移動しなきゃならないし、食糧になる家畜の面倒は一日たりとも欠かせない。だから旅なんて、夢のまた夢さ。だがこの生き方は嫌いじゃない。天に大きく左右される生活だが、争いもなく平和だ」

笑って言っていた彼であったが、不意に眼差しを真剣にした。彼の視線の先は、夜空の闇に吸い込まれている地平線の奥に向けられていた。

「だが最近は、おかしな風が吹いている。戦の噂が、この草原にも這いまわっている。君がそれを闇だと言うなら、それを鎮めることを目的とする旅をうらやましく思う。こんな

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

に美しい大地が戦で荒らされるのは、絶対に嫌だ」

想像しようとした。自分が育った森が荒らされる光景を。だが具体的な想像に至る前に、それはやめにした。試みるだけでも、辛い。

「ヒェミチリアスは近々大きな戦を始める。私は子供も小さいからまだ戦に呼ばれないが、隣の家からは家長の男と、十五の息子が連れていかれた。十八の病弱な長子が家を守っている。私が家畜の世話を手伝っているんだ。だからどうしても私はここを動けないし、もちろんその戦をやめさせられるような大きなこともできない」

男は悔しそうに顔をゆがませた。彼はまだ若い。もちろんトゥラスよりいくらか年上だが、それでも十も違わないだろう。

男は、トゥラスの瞳を捉えた。

「闇を鎮める旅だというなら、どうにかヒェミチリアスの戦を止めてくれ。グレネリア王は多分とんでもないことを考えている。そうでなかったら、こんな辺境の遊牧の民まで巻き込まないはずだ。最近も国を一つ滅ぼしたと聞く。理由は資源と食糧の略奪だ。相手の国を思うと、本当に申し訳ない。こんなことは絶対に続けさせてはいけないんだ」

正直なところ、戦とはどういったものなのかトゥラスはうまく想像ができなかった。人間同士の大きな戦いなど見たことはない。

しかし獣同士の戦いと違うことだけは理解していた。人間には策略という手段があるとリビは言った。そしてこの知能は、道具や武器を作り出す力を持っている。

市場での、あの剣と剣がぶつかり合う衝撃が右腕によみがえった。その右腕を見下ろし

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

てから、トゥラスは男の眼をまっすぐに見た。

「爺さんは、戦を広げるヒェミチリアスをどうにかすることが旅の目的だとも言っていた。俺は無知で何をどうしたらいいのかわからないが、あんたの言うことは良く分かる。だから、協力はしたい」

男は優しいその瞳をほんの少しだけ潤ませて、笑った。

「お前は名乗るのが好きではないようだが、名を教えてくれないか。戦の終わりと同時にその名が轟いた時、私は君のことをこの地に語り残そう」

まだ何もしていないのに、なぜそんなことを言い出すのかとトゥラスは笑った。

自分には何の力も無い。戦を止める力量があるなどとは到底思えなかった。

だが、この素直で穏やかな生活を愛する男に、名を預けようと思った。

「トゥラスだ」

「トゥラス……聡明なる勇気か。良い名だな。俺はアルタス。空と大地の間という意味だ」

壮大な名だ。この広い草原で生きる彼にぴったりだ。

そして自分の名の意味を初めて知って、嬉しくなった。これまで音だけだった自分の名が意味をもって、心の奥にようやく根付いた気がした。名に意味があることを初めて知ったのだ。

聡明なる勇気。誰が何を思って、この名を自分に託したのだろうか。確か、産みの母親が名付けたのだと養母が言っていた。自分のことは捨ててもいいから名だけは捨てるなと、何度も強く言われたのだ。その名がいずれ自分を導くと養母は言い続け、だから養母

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

が死んでからも捨てず、チュンオウに明かしたのだ。

このように名前に意味があるなら、チュンオウやリビ、そしてチュンオウが名付けたリョウキやヒョウビにも意味があるのだろうか。

「その聡明なる勇気で、戦など蹴散らしてくれ」

アルタスがにこりと笑って言った直後、背後から泣き声が聞こえた。振り返ると、家の入口のところでアルタスの末子が泣いていた。夜中に起きてしまって、みんなが寝ているので心細くなったのだろうか。話声が聞こえてこちらに助けを求めてきたようだ。

「ほら、泣くな。牛たちに笑われてしまうぞ」

駆け寄ったアルタスが、男児を抱き上げた。首にしがみつく子供の背を優しく撫でる彼の姿は、トゥラスの心を和ませた。この暮らしは、決して壊してはならない。

「ヒョウビ」

トゥラスはヒョウビの頭を撫でた。宝石のような瞳が、トゥラスの視線を受け止めた。

「俺と一緒に、頑張ってくれるか？」

ヒョウビの気高い眼は、トゥラスの顔をまっすぐに映していた。

「心強い」

トゥラスはヒョウビに笑いかけて、それからこの大地の風に眼を閉じた。

「あの山のふもとに城がある」

立派な角の雄牛にまたがったアルタスが、はるか遠くを指す。その先には、地平線に這うような山々が見えた。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

「アルタス、また会おう」
「ああ。頼んだぞ、トゥラス」
名残惜しかったが、チュンオウらの歩みに合わせてトゥラスはアルタスに背を向けた。
「ずいぶんと仲良くなったようだな。やはり同系の一族、心通うところがあったか？」
アルタスにもらった革袋に、リョウキに乗せていた荷物をいくらかまとめて背負ったリビが言った。
一番重い荷物を背負ったトゥラスが答える前に、リョウキの上からチュンオウが問うてきた。
「トゥラスよ、生まれの土地が分かったのか？」
「いや、それはわからねえけどさ。俺の名前の響きからこの辺りの生まれなんじゃないか、って、リビがな」
同意を求めてリビを見ると、リビは頷いた。
「トゥラスの真の名であるトゥラスホピネサリアという響きには、ホピネス族の古い名に似たものがあります」
「ホピネスとホピネサリア……。確かに、似ているな」
チュンオウは納得したように深く頷いた。
「ホピネサリアはどうか知らねえけど、トゥラスの意味をアルタスが教えてくれた。聡明なる勇気、らしい。アルタスは空と大地の間。名前に意味があるなんて知らなかった」
「よかったな。お前に似合わない大層な名ではないか」
「なんだと！」
リビは涼しい顔で、トゥラスの睨みなどかわしてしまう。
「じゃあお前の名前の意味を教えろよ」

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

「特に深い意味はない。チシュパクでは神話に登場する神や人物の名をもらう習慣がある。リビとは、まだ幼かったチシュパクの森の神々を守り育て上げた精霊の名だ」

そういう名の付け方もあるのかと、再びトゥラスには目からうろこだった。

「爺さんは？　なんでチュンオウっていうんだ？」

リョウキの上からチュンオウが微笑んだ。

「チュンオウとは、春の桜という意味だ。桜とは春に咲く花で、それは大層美しい花だ。私は桜の美しい春に髪を結いあげて成人を迎えた。その時この名を両親よりもらったのだ」

「成人した時？　それまで名は無かったのか？」

「途中で変わったのだよ。幼名はジメイと言った。子供の葉という意味だ」

名の扱い方も土地によって違うらしい。知ることは多い。

「じゃあリョウキは？　俺の兄弟につけたヒョウビって、どういう意味だ？」

立て続けに聞いたので、リビがうんざりを露骨に見せてため息をついた。しかしチュンオウは笑って答えてくれた。

「リョウキとは黄金の龍という意味を持つ。龍とは私の国で神聖視される想像上の生き物だ。お前に渡したその剣の装飾を見てみよ。鞘の部分に大きく描かれているだろう」

剣を見ると、鞘に不思議な生き物がうねっていた。奇妙な蜥蜴（とかげ）だと思っていたが、これが龍という生き物らしい。四本足で鱗（うろこ）があ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

るところから蜥蜴を連想していたが、その顔は牙や鬣（たてがみ）のある猛獣だ。だから眺めるたびに、どうも蜥蜴ではなさそうだと首をひねっていたのだ。

「なんだ、そうだったのか。爺さんの国にはこういう蜥蜴がいるのかと思ってた」

蜥蜴と聞いたチュンオウは眼を丸くしたが、次に大きく笑った。

それに少しむっとしたが、また新しいことを知れた事実に満足することにした。チュンオウの笑いが決して嘲笑ではないことを、トゥラスは充分に知っていた。

「ヒョウビとは、太陽や月を覆う神の反対側に位置する方角の神の名でな」

チュンオウは、歩調に合わせてうねるヒョウビの背を見ながら言った。

「その神は不浄を嫌うとされている。ヒョウビの美しい白い毛並みと澄んだ瞳を見て、この名が浮かんだのだ。食（しょく）をおこす神の対であることから、私は食とは逆の光を連想している。我らの求める光の方角を示してくれと、私はヒョウビに願いを込めたのだ」

素晴らしい名だと思った。以前は名などいらぬと豪語していたのに、意味を知ると親しみがわいてくる。名を欲するのは人間だけだと卑下していたが、意味を知ってその名を好く自分はやはり人間だとつくづく感じた。

「ヒョウビ」

トゥラスの声に、兄弟が振り向く。

「良い名をもらったな」

今更だが、名を得た歓びを兄弟と分かち合おうと思った。トゥラスの気持ちが聞こえた

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

のか、ヒョウビはまだ小柄ながらも、やや雷鳴に近くなった声を喉で転がした。

覆いかぶさるような空に、海を漂うように薄っぺらの雲が漂う。空はすでに端が茜（あかね）に染まり初めている。空の中央は薄桃色が淡い青に混じっていて、その空を一羽の鷹（たか）が飛んでいた。大きな空をぐるぐる回っている。獲物を探している最中なのか、降りてくる様子はなかった。

「あれが夜鷹か？」

リビの言っていたことを思い出した。ふと見ると、リビも空を見上げた。

「……夜鷹の主」

そう呟いただけで、リビは旋回をやめて飛び去る夜鷹を見送った。

トゥラスの上を飛んでいた夜鷹は、夜に包まれ始めた空に大きく一つ羽ばたいた。そちらをずっとまっすぐ飛ぶと、ヒェミチリアスの城が見えてくる。大きな山を背景に、ここはもう木々が多く生えている。

夜鷹がその城の上空に行くまでに、陽はすっかり落ちてしまった。虫の声が響く静かな夜。星の瞬きに包まれる、生き物たちの休息の刻だ。

昼間に活動していた動物たちは静まっている。鳥も蝶も羽を休め、牛や羊たちも動かない。

遊牧をやめた城下町の人間も、家の中で寝静まる頃だ。灯りがついているところは機織りの続きをしているのか、それとも農具や武器の手入れをしているのだろうか。

石造りの城の窓から小さな街を眺めて、そ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

のような想像を巡らせる一人の黒髪の青年がいた。その窓へ、夜鷹が舞い降りる。

「お前、また来たのか」

夜空から風のようにやってきた夜鷹に、青年は慣れた様子だった。

猛禽（もうきん）の大きな黄色い眼が、青年を捉えている。獲物を射竦（いすく）めるはずのその眼を、青年は恐れなかった。それどころか、青年は夜鷹に笑いかけている。

「鼠（ねずみ）はここより下の方が多いぞ。そうだな、多分あそこがいい。あの塔には、少ないが食糧がため込まれているはずだからな。食糧庫には鼠が多いと聞く」

青年が指差した塔に一瞥を向けただけで、夜鷹は青年のそばを離れようとしなかった。

「行かぬのか？　それとも、小さな鼠では不満か？」

夜鷹は幾度か首をかしげるような仕草をして、羽音を立てずに青年の肩に飛び乗った。

「驚いた！　お前、そんなに人が怖くないのか」

何も言わない夜鷹に、青年は苦笑した。

「なるほどな。お前にとって人間など、とるに足らぬ存在。小枝と同じということか」

そんなことを言っていると、石の廊下を速足で蹴る音が聞こえた。

「フェリス様」

黒髪の青年フェリスは、夜鷹と共に振り向いた。

「グレネリア王がお呼びです」

簡素な剣を下げた、分厚い頑丈な皮を着こ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

んだ武人が言う。

「わかった、行こう。私は一人で行くから、お前はもう下がっていいぞ」

男は胸に拳を当て、一礼をしてから去った。その男の足音が遠くなり、完全にその耳から消えるまで、フェリスはしばし待った。それから窓のそばのランプを持って、肩に夜鷹を連れたまま部屋を出た。

夜はひんやりと冷たい風が吹く。石の廊下を歩いていると、肩掛けでも羽織ってこればよかったと後悔した。

しばらく進んだ先に、細い光が漏れる部屋があった。そこが、父グレネリアの部屋であった。入り口には重たい絨毯のような幕が垂れている。両脇にいた兵が、槍を持っていない方の手の拳を胸に当てた。そのうちの一人に、ランプをあずけた。

「父上。フェリスです」

重たい幕の奥から「入れ」と、地の中を行くような低い声が聞こえた。

肩の夜鷹を気にしながら幕を押しやって中に入ると、豪華な敷物や家具の中に、父は鎮座していた。大きな椅子の上にさらに敷物を敷いて座り、それを三人の妻が囲んでいる。刺繍の細やかな服に分厚い皮の上着。その隙間から覗く帯は色使いが美しかった。フェリスのまとっている衣も随分と豪華であったが、王である父はもっと豪華だ。

部屋の隅と入口に兵が二人ずつ。暖炉には火が入っていた。

「フェリスよ。兵を率いて東へ下れ。その後は南だ」

父のその言葉に、フェリスは顔をしかめた。

「またそのようなことを。私は戦には反対だ

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

と言ったはずです」

「お前の意見を聞くと言った覚えはない」

息が一瞬止まった。言葉も自然と途切れ、フェリスは悔しく眼を細めた。

「兵は集まっておる。じきに今よりも数倍大きな軍ができよう。それと共に領地を広げてまいれ」

「ついこの間、隣国のエリノワを支配したばかりではありませんか！　それでも足りぬとおっしゃるのですか……！」

強く言ったつもりだったのに、父はぴくりとも動かなかった。

父は少し視線をどこか虚空へやって、呟いた。

「世界は広い」

「全てを支配するまで、戦を続けるおつもりですか！」

「世界は広いがな、小さいものだ」

噛みしめた奥歯が鳴った。

フェリスは踵（きびす）を返して去ろうとしたが、数歩で立ち止まることとなった。背後の父が立ったのだ。父が、近づいてくる。

「お前はうまく育った。民にも慕われ、自由を好む武人の民でさえお前のためにと戦に赴く。お前ならばこのヒェミチリアスを統一できよう。お前のために武人が剣をふるい、領地を広げ、ゆくゆくはお前が全てを統治するのだ。どうだ、気分が良いと思わんか」

「そんなものの、どこが良いのですか！　己の都合で大勢の人が苦しむなど、考えただけでも怖ろしい。民の平和に、戦などいらないはずです！」

「そうか？　……本当にそうか、フェリス？」

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

悔しいが、目が合わせられなかった。食糧の問題があったのだ。それを理解しているフェリスを知って、父グレネリア王は口の端を釣り上げた。

この土地はそれほど肥沃ではない。寒暖の差は激しく、城の近辺はやっと木々も生えるが、大地は砂礫（されき）が大部分を占めていた。草は生えても、少しでも天が気まぐれを見せると枯れてしまう。幸い池や湖はあったが、冬になると凍ってしまうので、雪が積もらなければ冬の飲み水はなかった。夏も雨にまかせるしかなかった。

高価な金属が掘れるわけでもなく、宝石も出ない。農耕もあまり収穫はなかった。比較的近い昔、遊牧を捨てて定住を選んだ民は、羊の毛織物を生産し他国と食べ物を交換することで生きながらえてきたのだ。

しかしその貿易だけでは足りなくなってきたのだ。

人口は増えてゆく一方だというのに、織物の値は下がってゆく。畑のためにわずかな森も切り開いたが、余計に緑が減っただけで、それによって水害が増えた。恵みのはずの雨がまとまって降り、禿げた山の土をそのまま民家に押し流したのだ。

水害で家畜が減った上に、復旧工事で金が消える。加えてこの父の性質上、他国との関係も悪化していき、どの国からも援助はなかった。

果ては気高い自由の民を使って近隣の国を脅し、食糧をむしり取っている始末だ。嘘ばかりの高給を謳（うた）い、兵も募っている。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

戦を広げる貧しい国、それがこのヒェミチリアスだ。

「この国の光は何だ？」

もうわからなかった。厳しい土地に、食糧不足。一つ誇りに思うものを挙げるなら、この土地でも力強く生きる遊牧の民。自然に身を委ねて生きるホピネス。

「……遊牧の民です」

「違う」

父はすぐに続けた。

「お前だ、フェリス」

父を睨もうと思ったが、父の視線は別のところにあった。まるで操り人形のように虚空に向けられている。そう、父は、もはや欲望の操り人形と化している。

「お前は光の子として生まれた。そして民に慕われる次期王に育った。お前の言うことならば民は誰もが信じよう。兵をまとめて全てを略奪してくるのだ。フェリス。それとも、お前はこのままこの国が死に絶えるのを見物しているのか？」

そんなわけにはいかない。だから何度も使いに手紙を持たせ、各地へ送った。だが実際は王子の力など微々たるもので、相手にはされなかった。

確かに、父が隣のエリノワ皇国を支配してから国は潤った。だがエリノワは悲惨な状態だと聞いた。炎に包まれ多くの人が死に、生きている者は家を失った上に身ぐるみをはがされたとも聞く。それはあまりに酷い。それで自国が潤って、どこに喜びと幸せがあろうか。

「父上は、自分が幸せであれば他はどうでもよいのですか！」

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

「そんなことはない。このヒェミチリアスのためを思って……」

グレネリアがフェリスの肩に手を触れようとした時、夜鷹が威嚇した。

グレネリアは舌打ちをして、手を下ろした。その隙にフェリスは言い放った。

「確かに私は今のヒェミチリアスを裕福とは思いませんが、だからと言って他国を陥れる方法で民を救おうとは思いません！」

今度こそ、フェリスは父の部屋を後にした。背後の呼び止めてくる声など気にはしなかった。預けていたランプも受取らず、真っ暗の石の廊下を進み、そのまま部屋に戻った。

部屋のベッドには、温かい毛織物が敷かれている。そこに腰をおろして、フェリスは深くうつむいた。

国が死に絶えるのを見ているだけかという父の言葉が、頭に響いていた。フェリスはその頭を抱えながら、先ほど窓から見下ろしていた街も思い出していた。

この夜に寝息を立てる者、灯をともして仕事を続ける者。この国での彼らの行く末が明るものだと、どうして言えようか。

確かに今のままでは国は枯れてしまう。それはすでに時間の問題だ。鼠が多いという食糧の塔では、わずかな食べ物も鼠に与えまいと鼠捕りを雇っているほどだ。

他国の平和を乱すまいとして己の国が滅びて良いのか。良くないに決まっているはずだ。だが、他国の民を虐げて自国が裕福になってもよいのかという問いも、否である。その二つの問いの間の答えが、なかなか見つからなかった。

「……私はどうすればいい」

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.

彼の肩に、夜鷹は静かにたたずんでいた。

Copyright © 2013 Yuki Tachibana. All rights reserved.